

「16, 17 世紀に西洋人から見た日本人」

Aldo Tollini

司会：Tollini 先生は日本の古典語、日本の仏教の専門家でいらっしゃいます。お手元の資料には今日の発表の概要が載っております。そして概要の下には多くの研究業績の中から代表的な3点を上げております。ご覧頂きますと、藤原定家の詩の概念、16世紀頃に日本に滞在したキリスト教宣教師の初期の文書に見られる仏教を扱っております。日本仏教の原典について編纂・翻訳されたものも出版されている先生です。

学生さんはご存じないかもしれませんが、16, 17世紀頃の日本ではキリスト教が大変盛んでして、最高で70万人位の信者がいました。当時の日本の人口が1200万位のうちの70万人の信者です。人口が10倍になった今は、カトリックが50万位、プロテスタントは60万位という状態で、今日Tollini先生が発表される時期が日本のキリスト教のピークであって、その頃日本で布教した宣教師が日本について色々ヨーロッパに報告をしております。先生はその報告をイタリア語、ラテン語、ポルトガル語の原典にすべて当たられて、今日のご発表下さるという訳で、なかなか聞けない話だと思います。ご清聴よろしく申し上げます。

Tollini：皆さん、おはようございます。ヴェネツィア大学東アジア学科のTolliniと申します。神奈川大学にお招き頂いて本当に嬉しく、有り難く思っております。ヴェネツィア大学と神奈川大学との交流がますます発展する事を願っています。

私に与えられた題は「表象としての日本」という幅の広い題です。外国人として出来る貢献は、

外から日本を見た印象であると思いますから、それについて述べたいです。しかし外国人の目で見えた日本というテーマはまだ幅が広く、絞る必要があると思ひ、ヨーロッパ人から見た日本人、時期はヨーロッパと日本の出会った16, 17世紀の時代を選びました。その時期のヨーロッパ側の記録は豊富に残っていて、今の日本人もきっと関心を持つだろうと思ひます。こうした資料は少なくとも4種類に分けられます。

まずはキリスト教関係の資料で、日本で活躍していた宣教師の資料で、例えば宣教師の年間報告等の西洋言語で書かれた物です。それから天正使節(1582年～1594年)に関係あるヨーロッパ人が書いた本。

次は俗人側の資料。商売等の目的で航海した人の記録と以上の記録や報告に基づいてヨーロッパで書かれた記述、それ以外の日本人を直接見て書かれた資料といった物があります。

現在ヨーロッパの図書館や国民図書館に保存されている資料は、特にイタリアは信じられない程その数が多く、研究の余地が沢山あります。日本人を描写した記録も多く、どう選べば良いか迷う程です。しかし、よく見れば日本人の表象について書かれた描写は数多い訳ではないので、それを使う事にしました。ここでは先に述べた4種類の代表的な資料を選んでイタリア語、ポルトガル語、スペイン語から日本語に訳しました。

1. 「イタリアで見た日本人天正使節」(1586年)。これは日本人使節の到着からリスボン出発に至るまでの記録です。彼ら日本人の使者は4人いて、ローマ教皇を訪れました。一般のローマ

人は日本人を見た事がありませんでしたから、皆に4人の容貌と作法を描写し伝える為に、こういう記録を書いたという事です。「使者にお会い出来ずご覧にならなかった方々が多いだろうから、彼らの日本の習慣、作法についてお知りになりたいだろうと思ったので、その他の細かい事は控えて少し説明申し上げればお喜びになるだろう。まず彼らの年齢について言えば、ローマに到着した時は皆18歳前後であった。身長は普通の日本人が余り高くないように、私達の間よりやや低い。顔色についてはその国が大変寒いので日本人は白人と言われていますが、長い旅の辛苦等のせいか色が付いて、どちらかと言えば薄緑色に近い。目は小さく、視力が鋭敏である。鼻の先は平べったく、顔は痩せ衰えているでもなく、丸くも無い。一般の外観はとても素朴で品格が高く見えます。体質は健康的だが、何度も繰り返された大変な風土の変化や食べ物の変化、途切れない旅の強烈な疲れの為に、4人とも時々病気になった事がある。食習慣は自身の道徳や節制、日本人の習慣の為、淡白で質素である。ワインを全く口にせず、いつも水だけ飲む。その水は日本の習慣通りに、かなり温かくして食事の終わりに一度だけ飲む。この使節団の実際についても一言追加すると、日本人の一般的な習慣として、食べ物を必ず皿に少し残す。その理由は食欲に執着することを下品とし、逆に自制出来る事が上品だと見なされているからだ。食べ方も私達と随分違い、床に座り個別に自分の前に小さな食卓を備え、料理が変わる度にその食卓も変わる。しかし、使節らが私達の椅子に座りテーブルで食事を取る事に慣れてくると、こちらの食べ方が彼らの食べ方よりも楽だと分かった様子を見せた。言語の習得について言えば、皆少しポルトガル語が出来、ラテン語、スペイン語もかなり良く出来る者がいた。しかし必ず通訳を介し、自分の言葉しか使わない。イタリア語は僅か勉強したうえ、幾ばくか分かる。ラテン語も勉強しているが、今の旅の多忙や他の色々な用事でたいてい文法のところまで留まっている。しかし私達の文字を大変上手に書く。日本の国民に共通しているように、時間が経つと、彼らが非常に賢いと分かる。科学の分野だけでなく、

どの学問でも早く学び、同じ様に音楽も短期間に多種の楽器、特にチェンバロを上手に弾く事が出来た。賢明である以上に、年齢の若さを越えた思慮分別や慎重さも明らかに示していた。従って、彼らの行動や発言の中に幼稚なものは一切なく、常に成熟していて、慎重な大人の厳粛さを示していた。また召使に向かっても必ず礼儀正しく、軽率な事もなければ下品な事ももちろん無かった。この厳粛さの為、一度も驚いた態度を見せなかったが、賞賛の価値のあるものに対しては言葉上手に褒める事を怠らなかった。会話ではそれぞれの方々と疎かにする事なく、行儀よく、正当な敬意を表した。これも彼らを高く評価する理由であることが認められた。友人の間の礼儀は言いようがない程、我等とは違いがあるが、彼らは宮廷で育ったかのように短期間で我らの儀式を的確に覚えて態度に表した。

彼らの道徳と信心は、明らかに正しく出来たキリスト教信者の精神的な働きの成果の報いである事が分かる。それゆえ神聖を汚す行動からは遥かに遠く、敬神の行いに、そしてそのさまざまな具体的な行いに大いに心が向かった。その敬神の行いが、若い年齢や大変な旅の多忙と困難によって、それから皇子や偉い人から受けた敬意や行為とによって逸らされない事は特に尊敬すべきである。昼間の祈りに加え、毎朝定期的に祈祷を捧げ、夕方には良心の糾明を行った。それは、いかなる用事があっても、例えば旅や他の妨げがあってもかならず皆行った。毎日のミサ聖祭に参列した時には、真剣に崇敬や感謝の気持ちを表した。告解には8日毎に赴き、時にはそれより短い期間のこともあった。このような秘跡は告解を聴く司祭によるので、司祭の都合が悪くて延ばすという事がなければ、必ず毎日曜日に聖体の秘跡に参列した。この時には前もって精を出して準備をしていた。そのために特別な祈りをし、皆一緒に戒律を守っていた。毎金曜日は習慣的に断食を守り、毎日の夕飯も普段から小食にし、夕食というよりも断食と言っても過言ではなかった。

精神上の事について言えば、キリスト教の道徳、例えば謙遜したり、自分をへりくだったり、俗世を軽蔑したり、自分の靈魂を大事にしたり、

その他の高尚な感情については、神様が彼らに豊富にお恵みになったので、彼らは聖職者のようにも、宗教的な最上級を狙う人のようにも見えた。時に彼らは精神的な問題についてお互いに話し合ったり、他の人に質問したりして、それを見て周りの人は大変喜んだ。

最後に彼らの信心について、多くの例の中で1つだけ取り上げたい。使者の1人は聖人の幾つかの聖遺物を持ち帰る為に頼んだが、直ちには貰わず数日後に延期し、その間に適切に受け取る為にお祈りを捧げ、特別の告解を受けた。これは彼らが神聖な事柄について崇拜し、自分が聖物を受け取るに値しないと思っている事を明らかに示している。

彼らはヨーロッパのキリスト教的な社会について、悪事の存在を疑う事がない程、大変に高く評価していた。確かに私達は高い評価の妨げになる悪口が彼らの耳に入らないように非常に慎重な態度を取った。彼らを何時も修道院に宿泊させる必要があると判断し、悪事を目にさせないように絶対に1人で行動させなかった。悪事を目にした場合も、彼らに邪悪の疑いが生じないように方便として嘘をついて彼らをごまかし、悪い事を良い事に塗り替えた。これは日本でキリスト教信者になった人々の妨害になる心配があったため、この使節にこのような配慮をする事になった。

この気遣い、特にわが主の助けのおかげで物事は無事進んだ。彼らは信じられない程の喜びや満足感を覚え、有り余るほど豊かで光彩をはなっているローマを目にした事だけでなく、スペインやイタリアの数多くの君公、グレゴリウス13世とシクストゥス5世から受けた好意、愛情、優しさはさぞ印象に残ったに違いない。特にグレゴリウス13世とシクストゥス5世という愛情や敬意に満ちたキリスト教の代表者から労わりや慈愛を恵まれたという事を、彼らは大きく評価した。

彼らは賢明で聡明な人々であるので、ローマやイタリアの各地で受けた歓迎や驚嘆に対する謝意を、日本に戻った際に異教徒にもキリスト教にも評価高く伝えるであろう。それによって聖なる神様は賛美され、ローマのシクストゥス5世も高く賞賛されるようになる。我らが望むように、もし

神様が彼らが無事に自国に戻されたなら、きっとそうなり、あの国民の為にもなると思う。」

次に、日本で見た日本人についてです。

1. 宣教師から見た日本人。「インドからの多様な特別の報告」(1958)の中にある「聖ザビエルの手紙から」。

「今まで発見した民族のなかで、われらが話を交わした人は一番良かった」

「異教徒の中にこれ以上良い人々は見つからない。概して丁寧話し合い、善良で悪意を抱かない、名誉を最も高く評価する人々である。一般の人々は貧乏だが、貴族の中でもその他の階級の中でも貧困は恥辱にならない。」

「彼らは控え目で丁寧でお互い尊敬し合うが、大いに武器を当てにする。身分の高い人々も低い人も14歳から常に剣や短剣を差す。彼らは侮辱、軽蔑の言葉を受けても、下劣な人々と違って平気である。」

「食事は控え目にするが、お酒を飲む時はかなり度を超える。」

「日本人はとても親切で愛情が深く、知識を熟望している」、とあります。

次はジョアン・ロドリゲスの「日本教会の歴史」です。「日本人は白人だが、北の人々のように全く白くはない。顔立ちは良く、顔は少し丸く、中国広東より、内陸の中国人に良く似ている。二心、三心を持つという人もいるが、これは間違いではない。一心とは口に出し表に示す心で、真の心ではなく偽りの心である。二心は自分の胸にあるもので、友達の為の心である。三心は自分の一番深い所にある、自分の為だけのもので、誰にも開かない心の事である。以上の3つから、その場のその事情に合わせて話したり行動したりする。中国人は商売で自分の利益を得る為に二心を使い慣れているが、日本人はこのような二心を契約や取り引きに使わないので、とても信頼出来る。もっとも、危険な出来事、特に戦に関わる事については慎重な態度を取る。例えば誰かを殺したい時や上手く追放させる為に、客を騙しながら見せ掛けの行為や陽気な風を装うが、急に首をはねる事がある。」

続いてアレッサンドロ・ヴァリニャーノ「日本

の事の概要」(1583年)です。「こちらの人々は皆白人でとても綺麗好きだ。庶民も労働者も宮廷で育てられたように見える位である。お互いに丁寧で信じられない程礼儀正しい。この事について、他の極東の民族のみならず、我らのヨーロッパの人々にも勝る。

大変有能で賢い民族だ。子供はとても頭が良く、我らの科学や学問を良く学び、容易くヨーロッパの子供よりも素早く我々の言葉の読み書きを身に付ける。我々の国みたいに卑しい人も無作法で無能ではなく、大抵皆親切で行儀が良い。

「世界でもっとも神経過敏で面目を大事にする人間だと思う。罵倒の言葉だけでなく、ただ怒った感じで言われた言葉にも堪えられない。従って一番低い労働者にさえも丁寧な言葉でしか話しかけられない。さもないと傷つけられる。そればかりか、彼らはその時にやっている仕事を儲けを全く考えないまま、怒って止めてしまうか、さらにひどい態度を取る場合もある。

「日本人は信じられない程忍耐強く、逆境を良く我慢する。大変有力な領主や大名が全ての財産や領土を失い貧困に悩むのがしばしば見られるが、何も失っていないかのように全く平気な態度を見せる。同じ様に、情熱に対してとても自制心があり、自分の中で強く感じて外に見せない。例えば、怒りを抑えながら、外には愉快的顔を見せる。」

次は宣教師でない人から見た日本人です。例えば商人ですね。フランчесコ・カルレッティ、フィレンツェの商人で「私の世界一周の論拠」(1580年代)です。「概してこの国の人々は器用で大胆で、それから見せ掛けが上手で、しばしば冷酷に、色々な理由で、剣で十字架の形で身を切り自殺する。男の残酷さに劣らず、女も自分の子供に対して同じ事をやる。悩み事を取り除く為に、特に貧乏である場合、胎内にいる子供、又は生まれたばかりの子供も殺す。

多くは王様または主の命令に応じて自殺する。主人にそういう風に言われたら、女も同じ様な事をやる。主人はその気になったら、女を殺しても誰にもその理由を聞かれない。君主は家来に対し

て、武士は召使や奴隷に対して同じ権力を持っている。

女性はとても美しく、かなり白い。目が小さくて、彼らの間では大きい目より美しいと見なされている。歯はわざとインクのような塗料で黒く塗っていて、それで口が奇妙に見える。同じ事は特に身分の高い男も15、16歳になるとやる。女性は結婚の年齢になると同じ事をやる。髪は真っ黒く、金髪より美しいと思われている。我々は象牙のように白い歯と金の髪を好むのと真逆である。」

2. エンゲルベルト・ケンペル「日本の歴史とシャム王国の描写」(1690年～1692年)。

「まず、日本人は中国人と大いに違う事を明らかに証明出来る。その違いは、社会習慣、生活様式、食べ方、飲み方、寝方、着方、頭の剃り方、挨拶の仕方、座り方等にある。

第2に、両国人の性向も著しく違う。中国人は平和的で慎重深く、冷静で、思索的な生活を好むが、詐欺や高利貸しの傾向が強い。日本人は逆に、好戦的で、反乱や放蕩の傾向があり、疑り深く野心的で、いつも大規模な企画の考案に熱心だ。

「概して日本人の庶民は醜い外見をし、背は低く遅しく足が太い。黄褐色で鼻が平べったく、頬が厚い。しかし、昔ながらの貴族の子孫や帝国の皇子や君主は、外観や表情が幾分壮麗で、ヨーロッパ人に近い。

「日本の東の方の住民は頭が大きく顔の肉は厚い事で良く知られている。」

3. 以上の資料を使ってヨーロッパで流れた情報。

(1)「日本列島の描写と日本人の掟や習慣」(1585年)。

「概して日本人は好戦的で、面目をととても大事にする民族だ。名誉を神様にし、名誉を高く保つ為に、その国の君主は沢山の戦争を起こす事に熱烈である。古代ローマ人の栄光を真似し、名誉挽回の為に自分を殺した例が少なくない。親戚はお互いに尊敬しながら、愛し合っていて、友人たちには忠実である。皆、悪習慣、特に不倫と窃盗を

避ける。

「日本人は道徳を好む。一番好んで練習するのは武道である。階級が高いか低いかを問わず、皆14歳から剣を差し、受けた侮辱の報復の為に勇敢に剣を使う。それなのに、適当にされた批判は落ち着いて受ける。

「これに反して、彼らは誇り高い。自信があり過ぎるために、外国の国々を全く評価しない。ヨーロッパから来た人々を軽蔑し、卑劣と見なしている。米で出来たワインのような飲み物を遠慮なく沢山飲んで酔うが、質素な食べ方で生活している。」

(2) ジョヴァンニ・ピエトロ・マッフェイ「東インドの歴史」(1589年)。

「背が高く体が整っているのが自慢である。多くは寿命が長く、勢いが良く、徴兵年齢は60歳迄である。顎鬚は少なく、髪型は色々である。子供はクリップで額を剃り、庶民百姓は頭を半分位剃り、身分の高い人は頭をほとんど全部剃り、首筋にだけ髪の毛を少し残す。その髪の毛を人に触られる事を大変な侮辱とする。空腹、渇き、暑さ、寒さ、寝ずの番、疲労等を素晴らしく我慢出来る。

「大体においてこの国の人々は賢明で礼儀深い。知恵に恵まれている。知恵、従順さ、記憶力において、アジアの国々だけでなく西洋の国々にも勝るといふ事は、子供を見れば良く分かる。子供は礼儀正しい習慣と高い思考力を身に付けていて、粗野な態度を示さない。彼らは我らの子供よりも素早くラテン語や技術を習得する。貧困は恥辱でも不名誉でもない。貧困に曝された人は慎重に物を使い、貧乏なのに清潔で整然とした生活を送る。無礼、窃盗、けしからぬ無駄な誓い、賭博の類を憎み、名誉や栄光を熱望する。

(3) ジャン・アルベール・メンデルスロ「ベルシャからの東インドまでの有名で驚くべき航海」(1727年)。

「日本人はとても良い友人だ。何故なら、彼らは助けやの保護の為に約束を願う人がいれば必ず応じ、必ずその約束を守る。例えば自分の家族を被害に曝してでも、子供と女房が困窮していても、助けを求める人を命懸けで助ける。従って、告発して共犯者を拷問に掛けさせる犯罪者が見ら

れない。逆に、告発して共犯者を死なせるより、自分が拷問を受けて死ぬ例が多く見られる。

「日本人はどちらかという、白いというより褐色である。強く逞しく、労働や季節の苦しみを非常によく我慢出来る民族である。空腹、渇き、暑さ、寒さに我慢強く、冬も夏も同じ服を着る。」

次は(4)フランソワ・カロン「17世紀半ば頃の日本とシャムの強大な王国の描写」です。

「日本人は訪ねて来る人に対して扱いが良く、丁寧だ。客に煙草や茶を出し、親しい友人の場合はワインも振る舞う。まず客を座らせ、漆のお椀を客の前に置いて、客が帰る前に椀の中身を味わわないと我慢出来ない。客を楽しませる為に歌を歌ったり友人が持っている弦楽器を弾いたり、色々な方法で歓迎して、客との会話を大事にする。」

以上のような多様な記録を見れば、西洋人の目から見た日本人の外観と性格のまとめが出来るでしょう。資料の種類によってかなり差があるので、なかなかまとまりにくいですが、まずイタリアでの天正使節の描写は大変評価が高いと言えるでしょう。もちろん僅か4人の身分の高い若者に限った事なので一般化は出来ませんが、その当時のイタリア人に深い印象を残したと思います。資料の種類を問わずほぼ統一している日本人についての判断は、次のようにまとめが出来ると思います。

A. 外観 ①人種は白人とほとんど変わりが無い。②背が低く、逞しい。③目が小さく、鼻が低く平べったい。④顎鬚が少なく、たいてい毛深くない。

B. 性格 ①聡明で機転が利き、習得が早い。②貧乏でも恥辱にならない。③名誉や面目を大事にする。④無礼が嫌いで、礼儀正しく、言葉遣いに敏感である。⑤窃盗、無駄な誓いを憎む。⑥食べ物には質素だが、酒を良く飲む。⑦好戦的で冷酷である。⑧見せ掛けが上手である。⑨苦しみや疲労に大変我慢強い。

これは16、17世紀の西洋人から見た日本人で、今の日本人とは大分違う所もあると思いますが、

参考になればと思います。以上です。

司会：今のお話に関して質問のある方がいれば1人か2人程どうぞ。

質問者：素晴らしい発表をありがとうございました。神奈川大学の国際文化交流学部のラットクリフです。当時のヨーロッパの目は日本人を人類学的にどう見ていたのかという点について、天正使節の事が書いてある資料の中で「この人達は白人です」とはっきりと言い切っている。これはどういう意味で白人と言っているのか、その点について教えて頂きたい。

Tollini：色々な資料を見ると、日本人は白人だと大体言っているんです。白人であるけれども西洋人とは少し顔色の様子が違う、と出てくる訳ですね。当時、どういう人種の分け方をしていたか分からないんですけども、当時のヨーロッパの人達はアフリカや南アメリカ、アジアに渡って色々な人種に合っています。アジア人でも、日本人と中国人と東南アジアの人では随分違うと思うんですけど、その中で日本人は一応白人と見なされているんですね。当時の人も結構迷っていたんじゃないですか。

質問者：白人と言う事は必ずしも肌の色の問題だけではなくて、別な意味を持っているという印象でした。肌の色に多少違いはありながら、やはりこの人達は我々と同じ様な白人であると認めているという事には、宗教的な意味とか政治的にどう扱うかという問題に関わりそうだと思うのですが、いかがでしょうか。

Tollini：そうですね。どちらかと言えば白人と言っていたのは肌の色だけではなくて、多分そういう事もあったかもしれません。

文化レベルにも関わると思いますね。西洋人としては、日本の文化は自分の文化と大体同じレベルだと思っていました。中国文化に比べても、日本の文化はアジアの中で一番評価されていたのでしよう。もちろんアフリカ等の他の国々とは比較にならない位で、その点でも親しみを感じたのではないか。もちろん随分違う文化だと認めているんですけども、白人と同じレベルの文化を持つ民族だという事で、日本人は白人だと言ったので

はないでしょうか。

司会：午後3時からのパネルディスカッションでもご質問を受けたいと思います。Tollini先生、ありがとうございました。それでは3分程休憩を入れて、10分から次の伊坂先生のお話に致します。